

飯山市にふさわしい資料館とは

はじめに

皆さん今日は。いつものように皆さんの前でお話しさせていただくことをうれしく思います。本日は求められた演題が高尚ですので、少し理想を高く掲げて、私の夢を語りたいと思います。

皆さんが求めている資料館は学べる場、学ぶための教材を保存する場だと思います。ここに集められる資料はふるさとの飯山に関係するものですから、学びたいのはふるさとのことです。それなら、ふるさとを学び考える意味はどこにあるのでしょうか。

飯山に生きる皆さんにとって、飯山とはどういう場所でしょうか。皆さんは飯山に生きていて幸せですか、心から飯山が好きですか。皆さんの反応を見ていますと、多くの方がそのようです。そうでなかったら、たまの日曜日に、こうして集まることはないはずですが、でもそうした飯山が好きだ、飯山で幸せだという気持ちをお子さんやお孫さんに強く伝えていきますか。

飯山が好きで皆さんから、地域を良くするために日頃から努力をしていてくれると思います。飯山が好きでないと考える皆さんの中には、自分が飯山を良くする努力していない人が多いのではないのでしょうか。



ふるさと飯山の風景

市民の皆さんは、あるいはそうでもなくともここにお集まりの皆さんは、それぞれがこの飯山に縁を持つているのですから、飯山で必要だといわれる人になっていきましよう。そのためにも、もつと飯山のことを知りましよう。

現在、飯山が置かれている状況は厳しいものがあります。本市に限らずどこでも聞かれるのが経済的危機です。私たちが求めてきた飯山市の博物館も、財政難から実現していません。このために、せめて資料館をとこうして多くの人が集まっているのです。こうした経済不況は、基本的に国政の不備から来ています。これまで国民の税金をどれだけ金融破綻（きんゆうはたん）につぎ込んだでしょう。あの膨大な金額がどういう意義を持ったのかきちんと説明もされないままに、次々に資金が投入されようとしています。また、これからどれだけ資金をつぎ込めば、こういう結果が出ると、しっかりとした展望も示されていません。この結果、国民一人あたりの借金は膨大なものになっています。普通の社会ならば、本人の意思を確認せず他人に借金をさせたら、詐欺罪（さぎざい）になります。国政は誰も責任を負わないままに、国民に膨大な借金を負わせています。

市町村は国のつけを払わされる側面もありますが、財政難で収入がないのなら、必要なものと、必要でないものとを峻別（しんべつ）して、可能な範

圃で行政を実施していくしかありません。その際に本当に必要なものは何か、未来に役立つ種はどれか、しっかり考えねばなりません。ややもすると国政を含めて予算裁定には前例主義が横行していますが、これは間違いです。こういう理由でこれは必要であり、そのため個人負担はこれくらいになるが、これだけの利益があるから私たちはやるのだ、と説明が求められる時代になっていることを忘れないでください。

私には本当にこのまま不況が進展することが悪いのかも疑問です。極言するならば、経済状況が悪いことは、人間として生活していくのに本当に悪いことなのでしょう。世界的に見た場合、日本の現状は決して貧しくはないのです。みんな仕事に分け合えば、一定度の収入は間違いなく確保されます。これまでの成長の方が異常だったのではないのでしょうか。不況を打開するためには、みんなが物を買えばいいと主張した人がりましたが、これはものを作って売る側の論理です。物流は大きいほど良いというのは、経済界の論理ですが、それだけが正義だと声高に主張されているようです。人間はお金があれば、物があれば幸せだとの考え方が、こうした主張の背後に見え隠れしていますが、本当にそうなのでしょうか。

今、飯山市を含めて問題になっていることの一つに市町村合併があります。財政難を理由に職員の数減らすところに眼目があるようですが、市町村合併は本来、そこに住む人の幸せが論議されなくてはならないのに、国は補助金削減という脅しをてこに、経済の論理だけで強引にこれを実行しよう

としています。その補助金は我々国民の負担だということに、政府は触れません。まだ国民に借金をさせようというのでしょうか。

なぜ合併しなければならないかを、市民一人一人の論理の中で論議する必要があります。場合によつたら、財政規模はどんなに小さくても、あるいは個人としての負担は大きくても、やはり独立した村であった方が、村人にとって幸せだということもあるはずで、市民にとって現状の町や村が必要なら、道や道路ができなくても、あるいは我慢しなければならぬことが増えても、行政を維持するはずで。

ここでも、なぜこんな社会、時代になつてしまつたのか、過去の国政レベルにおける政治家の政治責任が問われなくてはならないのに、なされておりません。社会がこんなに不景気でも、なぜ政治家は良い生活ができ、金もうけができていないのか不思議です。また、自分の責任もとらずに、悠々と暮らしていけるのか、その神経がわかりません。

飯山市にとって人口が減りつつあることは確かに問題です。でもこれは本当に悪いことなのでしょうか。人口がどんどん増えていったら、食糧が足りなくなり、住む場所もなくなります。地域に地域人としての自覚を持たないで住む人が増えたら、かえって周囲の人の迷惑になります。私は飯山の良い点の一つは、機敏に行政が動いていることだと思います。これは市の規模が小さいからこそ可能なことです。飯山市にとって、どのくらいの人口規模がいいのか考えましょう。市民としての自覚あふれ

た人が少数住む市の方が、人口は多いけれどもみんな他人で、市民なんてどうでもいいんだという人や、義務を果たさずに市に要求ばかりする市民の多い市より、ずっといいかもしれません。

こういうことを前提に、私たちは一人一人が人として生きることの意味を考えていかねばなりません。私たちが豊かに生きる時に必要なのは、お金だけではありません。お金がいくらあっても、豊かに生きるために使う術を知らなかったら、価値はありません。お金がなくても幸せはいくらでも手に入れることができます。自分を知り、過去をふり返り、今を考え、より良い未来をつくるために頑張っている人は、豊かな人生を送っている人ではないでしょうか。

私は人生やふるさとを学ぶための場として、博物館があると思います。しかし、飯山市は財政難で博物館が建設できないというのならば、せめて学ぶ教材（資料）を今のうちに集めて、将来勉強できるように準備しておかねばなりません。将来に備える資料保管庫、資料館が何としても必要なのです。そのことを、これからお話ししていきたいと思います。

一、何のために学ぶのか

私たちは人生を通じて、私という存在は何なのかを問いかけます。それは自己認識のためで、自己存在の意義を確認したいからです。自分の良いところと悪いところを知ることが、そのまま向上心につながります。自己を知れば自分の位置・立場が見えますから、自分がいかに行動すれば、より豊か



みんなで学ぶ

に生きることができるとか、道が見えてきます。私たちが学ぶ第一の意義は自分を知ることなのです。

自己を問うことは、自分を大切にすることです。私たち一人一人がかけがえのない命を有しています。一人一人が多く集まって社会ができていくのですから、どんな個人であつても人類の宝といえます。自分を知っている人は、他人をも大切にすることができます。自分を問うことのできない人に他人の尊重などできるはずがありません。社会は多くの人によってできていきますから、自分を尊重して欲しいのなら、他人を尊重することから始めなくてはなりません。近ごろ、自分は大切だが他人はどうか、という人が増えました。こういう人は自分をも大切にして

いけないのではないかと思います。

皆さんは一人一人が他人に尊重してもらえよう、人格形成に努力されていますよね。飯山人としての義務を果たしていますよね。義務を果たさずに要求ばかりするような人は、ここに集まっていないはずですよ。

私たちは人間ですが、人間とはどのような特徴を持つ生物なのでしょう。基本的に社会的動物であり、群れながら文明・文化を創ってきた生物です。孤立して生きていけない以上、みんなと心地よく群れる手段を模索しなければなりません、そのための第一歩は他人を

尊重することです。多くの人と共に生きる中で、文化や文明は創り上げられました。孤立した個人では、文化は創ることも維持することもできません。

文化は過去の営みの上に積み重ねられたものです。先祖たちの歴史があつて、今の我々が存在するわけです。歴史の重さを認識し、我々もまた過去の歴史に責任を負いながら、未来をつくらねばなりません。

私たち一人一人が、人類の構成者であることを意識しましょう。全体の中では存在していないように見えがちですが、それぞれの個性が集まって豊かな色彩を持った人類になるのですから、みんなが同じ色だったら人類はつまらないものになります。全体の中の自分を知れば、自分のエゴから脱却することもまた可能でしょう。

私は歴史学を専攻していますが、この学問は私たちがどこ（時、場、社会）から来て（過去）どこに行くのか（未来）を学ぶものだとして理解しています。まずは自己を時間の中に位置づけることから出発しましょう。それぞれが個人の歴史の中で、今がどういう時であるか、どういう意味を持つのかを考えましょう。その上で、家族の歴史の中で、飯山の歴史の中で、長野県の歴史の中で、日本の歴史の中で、全人類の歴史の中で、同じ作業をしてみましよう。私たちは個人として生きますが、個人の力では抵抗できない社会の流れもあります。個人としては戦争に反対しながら、戦争にかり出された人も多いはずですよ。



飯山史跡めぐりの遊歩道

私が私であるためには自分に自信を持つことが必要です。そこで、自己の存在意義に思いをめぐらさねばなりません。自分の価値を知るために、長所を自覚して、それをさらに伸ばし、自分の短所を克服するようにしましょう。

自分を知る時、ふるさとに自信を持つことは大切です。自己が育った場所、文化に誇りを持つことは自信になります。飯山は本当に良いところですよ。よその人には寺町がもっともよく知られていますが、自然、風景、周囲の人々、文化どれをとっても素敵です。私は今、市民の皆さんのために『飯山風土

記——信濃の寶石 飯山——』（飯山振興公社より二〇〇三年発刊）

という本の原稿を書いています。書きながら改めて飯山はすばらしいなあ、これも知らせよう、あれも中に入れようと思っています。

みんなで飯山の良いところを認識し、お互いに教えあい、さらに誇りを抱きましょう。おそらく一人一人が大切に思っていることは違わずですから、仲間たちからも学ぶことができます。同時に飯山の悪いところも確認しましょう。文化もお医者さんが診る患者と同じで、悪いところがわかれば、対処は可能です。飯山がもっと良くなれば、皆さんはまた誇りが積み重なります。

いいところも悪いところも、すべてが過去から来ていますから、

確認するためには、過去を学ぶことが重要です。私たちは歴史に規定されています。現在が過去の延長線上にある以上、根っこを探らねばなりません。

過去を探ることは今を考へることと直結します。自分たちがどんな時代に生きているのか知ることが大事です。間違いなく、現在は戦国時代、明治維新、敗戦などと並ぶ、あるいはそれ以上の激動の時代で、社会が大きく転換しようとしています。これまで当たり前であった終身雇用制、年功序列制は終焉を迎え、能力主義になりつつあります。学歴ではなく、実際に問題解決ができる人が会社などでも望まれています。これまで発展と評価されてきたことすら、本当にそうなのかと振り返らねばならなくなっています。旧来の枠組みからいかに脱却するか、新たな方策をどのように打ち立てるかが、今問われているのです。

自分が生きている空間認識も同様です。私たちは飯山の地域に生きていますが、自分の住んでいる集落は飯山でどのような意味を持つのでしょうか。長野県の中の飯山、日本の中の長野県、アジアの中の日本、世界の中のアジアといったふうには、きちんと地域を考えていかねばなりません。注目すべきは、空間を超えて我々が世界とつながっていることです。日本人が食べている食料の六割は輸入品です。衣類をはじめとして様々なものが外国で作られています。私たちの思想も日本独自のものではありません。海は外国とつながり、空気も外国とつながっています。空気や海の汚染は世界の災害になります。

実際にインターネットの普及により、パソコン上では距離がなくなりました。世界の結びつきは、これまでのあり方と異質になりつつあります。

先ほども述べましたが、私たちがこれまで依拠してきた社会制度は疲弊ひひしつつあります。町村合併も地域制度を大きく変えることにつながります。その一方で、依然として改善されていないこともいっぱいあります。職業選択の自由は保障されているのに、今や身分社会ともいえるような状況があります。なぜ国会議員には二世が多いのでしょうか。血筋は政治をする上で必要なのでしょうか。同じように医者の子どもはなぜ医者になるのでしょうか。利益の多いところには、その利益を独占しようという動きが生じます。政治家が本当にきつくて利益のない仕事なら、二世議員、三世議員は生じないはずです。こんな状況だから日本の政治を誤るのではないのでしょうか。

いずれにしろ、今の良いところと悪いところを認識するには、広く世界に目を向けることと、過去を振り返る必要があります。社会を転換させねばならないとするならば、なぜこんな風になったのか、どこで道を誤ったのかを確認しなければなりません。道が間違っていないければ、周囲がどんなことをいおうと、自分を信じて前進すべきです。

日本人がもっとも不得意なのは、歴史が積み重ねられて今があると認識することです。年末が過ぎ、新しい年になると去年の出来事はすべて忘れて、去年と異なった新しい一年をつくらうとします。昭和が過ぎ、平成になれば昭和の時代は過ぎたもので、新しい時代が始まると考えます。こういう思考



きれいな希望湖の水

に慣れ親しんできた私たちは、過去は過ぎたのだからと忘れ、新しいことだけ見ればいいとして、ややもすると過去に対する責任を問いません。過去を見ないから一時期しか効果がなく、先が示せない公共事業などを行っているのです。

現在の次に来るすばらしい未来の理想はどんなものでしょうか。

私は人間が人間として今よりも幸せな生活を送れることだと思っています。そのためには何が幸せか認識していなければなりません。子どもたちに幸せの意味をしつかり教える必要があります。本来、道具は我々の生活を良くするために考え出されたものです。ところが、農業の機械貧乏という言葉で象徴されるように、生活を楽にするはずの農機具を買ったおかげで借金が増え、労働時間が増えるといった矛盾がいつぱい起きています。もう物を手しようとする時間と精力を使う生活は終わりにしたいものです。ある物に満足できる人でなくては、この先、飢餓感^{きがかん}だけが襲^かってきます。

皆さんが大切な人に与えたい未来は、人がにこやかな顔で生きていて、お互いが信用でき、共に生きていく社会ではないでしょうか。ところが、私たちは今、子どもたちに国債^{こくさい}などの形で莫大な借金を負わそうとしています。大気の汚染、水の汚染、さらには地球温暖化など、とてつもないつけを次



寺町の秋

代に残そうとしています。こんな状況で子どもたちは夢や大志を抱くことが可能でしょうか。子どもたちはテレビや雑誌などを通じて、これが欲しいあれが欲しいと足りない物を数え、すべての基準をお金でしか見られなくなりつつあります。コマースヤルを正しいものとして、そのこと自体に疑問を感じなくなっています。販売促進の宣伝にのり、幸せは物を充足することだと思っています。目の前の小さなえさに食いつくことだけ考え、遠くにある夢、人間の未来に思いを馳せなくなっています。これは私たちの責任であり、きちんとした政治家を選出することが少なかった債務です。

もう一度皆さんに聞きたいのですが、皆さんは子どもや孫に幸せを提供したいとお考えになりませんか。皆さんは幸せ・幸福をどんな時に感じますか。お金を手に入れた時だけという、さもしい人はいないはずですか。どんな些細なささいなことにも我々は幸せを感じます。朝学生から挨拶あいさつされただけでも私は幸せになります。そうです、幸せというのは心持ちによるのです。大金持ちでたくさん財産を持っている人でも不幸な人はいるし、貧乏で借金を負っていても幸せな人はいます。

人はどうすれば豊かに暮らせるのでしょうか。豊かさの概念をしっかりとつかまえます。みんなで心豊かに暮らす術を語り合



「阿弥陀堂だより」のセットにて

ましよう。私はまず飯山の四季に幸せを感じ、いい空気と水に幸せを感じ、いい仲間がいることに幸せを感じたいと思います。こんな贅沢はないのです。なべくら森の家で飯山市が主張しているのもこの思想だと理解します。

私たちの飯山市を舞台にして撮影された映画「阿弥陀堂だより」が訴えたのは、これだったはずです。だから、日本中であの夫婦の生き方に共感を覚えた人が多くいたのです。昨年で放送が終わった「北の国から」というテレビドラマで、田中邦衛が演じた黒板五郎は、都会での生活から離れて北海道に行きましたが、その生活に多くの人が感動しました。これもまた、自然の中で生きる幸せ、周囲が良い人たち

の間で生きる幸せを訴えていました。

幸せは金や経済論のみで成り立ちません。お金は人間が共通の物差しとしてつくり出した尺度の一つでしかないのです。個人の思い出や感情はお金では買えませんし、換算できません。自分が幸せだと思ふ尺度を自分なりにつくり、そこに揺るぎない自信を持つべきです。

どうすればみんなが幸せになれるのでしょうか。現在では自分だけの幸せを考える人が多くなりましたが、それでいいのでしょうか。現代社会では競争原理が基本になっています。極端かもしれませ

んが、誰かが損をすれば誰かがもうかるのが一般的です。未来においてはみんなが幸せになりたいと思います。皆さんは自分が我慢してでも子どもにはいい思いをさせたいはずです。子どもや孫、恋人のためには経済の論理でない価値基準で行動します。しかも、自分のやせ我慢は自分の幸せになつていくはずで。

私たちの日常では、すべての価値を貨幣価値においているわけではありません。幸せは人によって差があります。家の文化はみな違い、大切にしているものが異なります。地域の文化は地域ごとに価値観に差があります。貨幣は尺度の一つなのに、今や尺度が一人歩きして、手段が目的化してきています。多様なはずの価値基準が一つしかないように思われています。お金や物の論理は、これしか持ち得ない都市住民の論理ではないでしょうか。多くのメディアが、都市から都市民の価値観を農村や山村の住民にも押し付けています。でも私たちは、それ以外の価値観を持つてもいいはずで。みんなが同じ価値観であることの方がおかしいのです。価値は場所により、時代により、人により異なるのです。過去には大変価値があると評価されたのに、今となっては通用しない物がいっぱいあります。一時は大変な価値を持ったのに、今やゴミ屑と化した物は数多いのです。

私たちはもともと、自分たちが都会とは異なる論理を持ち得ることを主張しましょう。そのためには、自分に自信を持たねばなりません。自分が納得できれば、違う価値基準だって誇って語れるはずで。それこそ自己の確立になります。

今多くの人が問題にしている経済成長が止まることは、本当に悪いことなのでしょうか。経済成長という掛け声のもとに、賃金をえさに仕事に追いまくられることは良いこととは思えません。幸せは金で買えません。それぞれの人のとって大切な時間を切り売りするに際しては、その見返りが本当に幸せを与えてくれるのか、天秤にかけてみる必要があります。心豊かに生活するために必要な物を得るために働くのであって、ストレスを蓄積させたり、疲労を得るために働くのではありません。幸せを得るための労働が、いつの間にか目的化されてはいませんか。楽しむのに最低限必要な賃金を取り、後は楽しめばいいという考え方は、映画「釣りバカ日誌」などに現れており、多くの人の共感を得ています。

こういったことを思索し、自ら方向を決めていくことが学ぶことだと、私は考えます。

二、学ぶ材料はどこにあるか

生きることは学ぶことです。学ぶことは生きていくための手法を得、より良く生きる手段を入手することです。心豊かに生きることは幸せを提供します。

ところで、現代人は昔の人より幸せだといえるのでしょうか。テレビなどから流れるコマースシャルにより、多くの人が物、金に対する飢餓感をぬぐえませんが、働き蜂といわれる日本人は、心豊かに暮らす手段が物やお金だったはずなのに、それを得ても楽しく使う時間がなく、使い方を知りません。



舞の剣の川名桑

金がなくても、時間や心に余裕がある方がいいという価値観をすっかり持つべき時期に来たのではないだろうか。

学ぶ教材は周囲のすべてです。過去を学ぶには古文書、遺物、地名、食物、農作物、衣類など、ありとあらゆる物が利用できます。今を学ぶには新聞、雑誌、テレビ、うわさ、アンケートなど、これもまた無限に手段があります。

人が人である以上、もつとも学ぶべき対象は周囲の人たちです。私たちは社会ルールも、生き方も、近くの人から学んできたはずで、文化は身近な人から伝えられてきました。きちんと他人から学ぶことができれば、自分を相対化していくことができます。自分と他人の区別をすっかりなしうる人は、異文化コミュニケーションもしつかりできるはずです。

学ぶ方法の一つは、自分が住んでいる地域と他地域との比較です。他地域を知れば、自分が住んでいる地域を客観化することが可能になります。ふるさとの実態はよそを見てわかるもので、故郷を離れるとその有難さも悪いところも、目につくようになります。広い世界を本当によく知っている人には、奥深い知識が詰まっているものです。

自己の位置づけは周囲の人との比較によってできます。自己は他と

の比較で認識されます。自分が他人からどんな利益を得ているか、自分は他人の役に立っているか、これを知ることが自己認識であり、自分を豊かにする第一歩になります。

人はみんな生きたいと思うものです。この気持ちを支えているのは、自分が大切で、生きていることに価値があるとする気持ちです。その際、私たちは客観的に他者に対して、本当に価値があるんですよ、といえるようになりたいものです。そういえることは、そのまま私たちの幸せにつながります。私たちは父や母があつて生まれ、その前には先祖がいます。私たちは勝手に自分だけで生まれて、育ってきたわけではなく、人の歴史の中で生かされているのです。私たちが過去からつながっている生命の一部なら、このつながりを未来にも伝えていかねばなりません。先人から伝えられてきたバトンは、きちんと次の次代に伝えていきましょう。それは人としての生命だけでなく、蓄積された文化についても同様です。

人間は社会的動物ですから、一人で生きていけません。本能としても夫婦の対象を求め、家族をつくって生きてきました。そして、家族のためには自分を犠牲にしてもという気持ちを強く抱き続けました。自分を捨てて行動できる相手を持つことは幸せです。他人のために奉仕できる人は、活動を通して幸せを実感しているはずです。ボランティア活動をもっとも救われているのは、活動をしている本人ではないでしょうか。

このように、学ぶことは生きることなのですが、社会の大きな変動に対応して、近年、従来あった

教材が急激に消えつつあります。社会は新しい物を求めます。音楽についていうなら、少し前までアナログレコードだったものがステレオになり、CDに変わり、MDへというように、次々に変化しています。無理して買ったワープロはもう生産されなくなり、取って代わったパソコンも数年おきに買い替えねば古くなります。こうなって思うのは、アナログの音に情感があったことであり、自筆の文字には温かさがあつたことです。考えてみれば、アナログでなぜ悪いのでしょうか。悪いわけがありません。いつも追いまくられるように機材を買い替えている私は、コマーシャルリズムに踊らされているだけかも知れません。本来なら機械化は私たちに幸せをもたらさなければなりません。時代の発展もそのはずです。パソコンは便利ですが、これを入手するにあたって働いた時間、その成果などをすべて勘案して、本当に私たちを豊かにしてくれているのでしょうか。機械化が必ずしも幸せをもたらさなかったことは、チャップリンが映画「モダンタイムス」で批判している通りです。近代の原子力開発は、原子爆弾という負の遺産をもたらしました。これもまた、社会の発展といってきたものが必ずしも発展ではないことを示します。近年の学生は次の時代が今より良くなるとは思わなくなりました。歴史は発展するとは限らないと理解するにいたつたのです。

現代人にとって最大の問題の一つが、あふれる物とゴミ処理です。飯山市においてもゴミ処理場問題は大きな課題になっています。社会発展は大量消費にあるが如き感を我々は植え付けられてきたのですが、今になってそれが幻想だと思ひ始めました。ゴミは目に見えないところに押しやられただけ



黒岩山から見た飯山

で、私たちのまわりに再び形を変えて帰ってきます。山に捨てられたゴミが水を汚染しはじめると、すべての水が駄目になります。ゴミを焼く時に出るダイオキシンは史上最強の猛毒です。地球温暖化は二酸化炭素が元凶になっているようですが、これも我々が出している廃棄物です。しかもこうしたゴミは地球上の人がすべて平等に出しているわけなく、アメリカや日本といった特定の国の住民が大量に出しているのです。一方の人間はゴミを出して地球を汚染し、一方の人間はゴミも資源にしていながら、よその者が汚した空気や水を使わねばならないのです。ゴミ排出は資源の浪費と直結しているのです。

ゴミの排出の状況を見ると、日本人が物を大切にすることを喪失しているように思われます。そこには人間のおごりが見られます。これまで人間が行ってきた自然改造、近年問題になっているクローン人間の誕生など、人間がすべてのの上に立てると勘違いをしているようです。この気持ちの増大とともに、人間は自然に対する畏敬の念を忘れ、互いを思いやる人間らしさを失ってきています。少なくともゴミにされた側の気持ちを思いやることはなくなりました。十六世紀末に描かれたとされる「百鬼夜行絵巻」には器物の妖怪が登場します。日本人はこのように物には魂がこもっていると考えてきたのです。こうした、道具に対する気持ちを忘れていいものでしょうか。

「百鬼夜行絵巻」に描かれている道具の一つ一つも、私たちにとっては教材です。身のまわりの教材にすべきものには消えていくものと、消えていかなないものがあります。一般論として、入手する時に金をかけた特別な道具などは残ります。これは金がかかっているのもったいない、持っていることがステイタスシンボル（地位の表象）だったなど、いくつかの理由により保存されたからです。たとえば豊臣秀吉や徳川家康の道具や衣服は今でも伝わりますが、圧倒的に多くいたはずの庶民の衣服は残っていません。これは持っていた側にとつて、特別な人の物だから価値があると認識されていたからで、特別な人に関係した物を持っていると自分の家柄を示したりするのにも有効でした。同様に家に伝わる古文書などは、何らかの利益の源になっていたから廃棄されなかつたのです。むしろ伝わっているものは、意図して伝えられてきたのです。

当たり前前ものは消えていきました。誰がボロボロの下着や使い古しの日常の食器、道具を数百年も保存しておきますか。庶民は記録も残さず、使用した道具なども残していません。皆さんは秀吉や家康ではないはずですが、皆さんが知りたいのは自分と同じ一般人の過去ではないでしょうか。このままいったら、皆さんの日常生活の実態も伝えられない可能性があります。皆さんの子どもだった頃に使っていたあれだけ多くの道具は、ほとんど消えてしまっています。

保存しなければ学べない大切なものは、周囲にいっぱいあります。しかし、個人の力では保存できないことが多いのです。ウサギ小屋と評された狭い家、物を持つことが進歩だと思つて手に入れたあ

ふれる物、しかも一つ一つの道具の使用期間はきわめて短くなりました。昔の道具の寿命と比較して、今のOA機器の寿命の短いこと、消費は美德だとの掛け声、これで周囲の道具が守れますか。たとえ物置におくとしても空間はとられますし、置き場所に困ります。結局、保存には金がかかることになりますので、いらぬ物として捨てざるを得ないのです。その結果、ゴミ問題がさらに深刻化します。もっと困るのは、目に見えない技術です。技術のストックはされていません。日本の産業を支えた職人の技が今消えようとしています。これは日本のもっとも大事な財産かも知れないのです。

私は年間二五〇万円近くの本を購入しています。本を買う費用は家計を圧迫しますが、それ以上に困るのは、本を置く場所がないことです。なぜこうなるかというと、信州大学では本を買う予算が少なく、しかも図書館に本がないから、研究のためには自分で本を用意しなければなりません。日本では本を個人で買うのが当然とする考え方がありますが、ヨーロッパではそうではありません。ヨーロッパでは本は図書館から借りて読めばいいのです。日本では教育に個人や各家が負担する金額は大変なものです。しかし教育を受けた人は社会の財産であり、教育施設は公的な財産であるべきです。教材は公的に用意すべきではないでしょうか。だからこそ飯山市も市立図書館を設置しているのです。価値観は個人によって差があります。特定の個人にとって重要な物も、圧倒的多くの人からしたら、大変な価値を持つことがあります。かつて日本でつくられていた農産物が多く姿を消しました。つくっていた人にとっては一時のことでしたが、気がついてみるといつでも入手できると思っていた

種が、手に入らなくなっているのです。アメリカでは農作物の種を戦略にし、重要な商品にしています。日本においてもトウモロコシなどは、アメリカからいつも種を輸入しなければならぬ状況になってしまっています。

文化財保護の考え方は、みんなにとって価値のある物は、個人の所有を超えて価値を持つので、私的所有権を超えて保護していこうとするものです。国宝が自分の所有物だからといって、これを焼くことは国民の財産を勝手に減らすことになり、許されるべきではありません。このために国や県、市町村が様々な保護を文化財に加えているのです。このように文化財などの保存は、公の手でしなければならぬことです。このまま保存しておけば、いつの日か価値を持ちうる物を、個人が持ち伝えられないからといって、みすみす捨てるのは良くありません。飯山市としては大量消費、大量廃棄に手を貸すよりも、価値ある物をきちんと判断して、伝えることに努力すべきです。伝えられた物は必ず学ぶ際の教材になるはずで、飯山は率先して教育資材を公で持ち伝え、学ぶ材料を積極的に市民へ提供すべきです。

みんなが必要だと思っても、個人の力ではなし得ないことをしていくのが、公であり行政です。道路、安全、下水道、教育、こういった施設は行政が先を見ながら、市民に提供してきたものです。行政は未来を見ながら市民をリードする役割をも負っているのです。飯山市は市民に何を提供するか、同時に市民の意識をどのように変えていくかを考えていると思いますが、その一つは市民が生涯学べ



飯山市埋蔵文化財センター

る材料・教材を用意してやることではないでしょうか。将来に向けて教材を用意するためには、資料の散逸を防ぐために何としても資料館・収蔵庫が必要なのです。

三、資料を保存する意義

未来に学ぶ教材として、この時点で保存できる物を保存する、そのための場所を資料館・収蔵庫として準備して欲しいというのが私たちの願いです。それなら資料を保存する意義はどこにあるのか、

これまでとは違う視角から述べてみましょう。

現在、市が持っている資料の一つに考古資料があります。毎年大量に発掘される遺物のために、埋蔵文化財センターもだいぶ手狭になってきています。そこに収蔵されている発掘品は、市の宝物です。これまでに要した発掘費用、整理保存にかけた金額などを考えると、市は一点一点の発掘品を入手するため、相当のお金をかけてきたこととなります。市民の税金を投下して得た市の財産は、良い形で次代に伝えねばなりません。発掘調査報告書は市民に読んでもらい、学んでいただいはじめて意味を持ちます。学ぶ人は遺物を見たくなるはずですし、場合によると遺物を確認しなければなりません。

ところが、このままでは市民に学んでもらうための、発掘品を収納していく空間も、埋蔵文化財センターにはなくなりそうです。

飯山市にも大量の行政文書があります。公文書なども資料作成に要した人件費、その内容、情報量からしたら、これまた市にとって大変な財産です。こうした文書は酸性紙が使われており、劣化が急激な勢いで進んでいます。皆さんも戦時中の本や書類を見れば、茶色になってきて、紙がすぐに折れてしまうのがわかるはずです。ここで保護の手を打たないと、大事な統計資料などを永遠に失うことになります。現在、すべての分野で情報公開を求めるときが進んできて、情報公開は行政の義務になっていきます。風通しの良い情報公開は地域の誇りです。ところが、飯山市の場合には過去の情報がこのままでは取れなくなる可能性もあるのです。

日本学術会議は昭和四四年（一九六九）「歴史資料保存法の制定」についての勧告を行い、都道府県単位の文書館設立を促進し、昭和五年に「文書館法の制定について」を勧告し、昭和六二年に「公文書館法」が制定されました。この流れに沿って、今や市町村単位で文書館がつくられています。飯山市の旧役場行政文書整理済み資料は埋文センターの二階にあります。決して保管条件がいいとはいえません。また、飯山市には各施設に分散収納されたままになっている文書もたくさんあります。飯山市でも今後ある程度に対応が望まれます。現状ではきちんと対応できないとしたら、その第一歩として長く保存するため、資料館にとりあえず収納するのがよいでしょう。

市内には多くの古文書が残っています。全国的な動きとしてはこうした古文書を家で持ちこたえられなくなり、価値がわからないまま、朽ちるに任されています。一方では古文書が売買の対象になり、故郷から離れるようになってきました。こうした中でよく耳にするのは、もし可能ならば地元で委託したい、寄託したいという希望です。各地の博物館が建設されるに際して合言葉になっているのは、大事な資料を散逸させまいということです。飯山市には古文書を受け入れるような施設がありません。このまま行くと、市域に伝わった大事な古文書がみすみす散逸していく可能性があります。施設をつくってこれを受け入れていくのが、長い目で見れば市にとってもっとも良いことと思われま

す。飯山市内にはまだ民家の中に過去に使われた道具などが眠っています。これも急激に散逸してしま

す。家ごとに保存ができないのであれば、きちんとこれを保存することは地域文化の確認になり、行政の使命でしょう。またすでにある民俗資料も、ほりまみれしておくのではなく、技術がわかるようにきちんと保存・研究すべきです。

現代文明が抱える課題の一つはエネルギー問題です。私たちの飯山市ではかつて炭が焼かれています。今やその技術も途絶えようとしています。化石燃料には限界がありますので、炭焼文化などは課題克服のため、未来に伝えていかねばならないことです。炭焼や薪づくりなど、林業に係る道具はどのくらい残っているのでしょうか。また市としてどのくらい保管しているのでしょうか。

日本の食糧自給率は四割ですが、ずっとこのまま輸入していけるのでしょうか。日本は自ら食糧を



豊かな飯山の水田



飯山市が保管している民具

生産する技術を失いつつあります。現状では小規模農家は経営が成り立ちませんので、農家の数がどんどん減っています。実際、あれだけきつい労働をしても、収入ということになるとわずかです。経済を優先していたら農業は職業として成り立ちません。食糧輸入ができないから、さあ自分で作物をと声をかけても、気がついたら飯山でかつて作っていた農作物の種も、農作物を作るのに使っていた道具も、農業技術も伝わっていなかった、ということになりそうです。防衛は本来、個々の命を守ることから始まります。安全な食糧を、日本内部で生産できるようにするためには、伝統的な農業技術を維持しておく必要があります。少な

くとも歴史の知恵を凝縮した地域の農具などを、しっかりと保存し、いざという時に復元できるようにしておくべきです。

このように、様々な資料を伝えることは意義があります。しかしながら、その教材が急速に散逸しているのです。今は保存する最後の機会です。

教材が用意されていなければ、学ば

うとしても学ぶことができません。私たちが学ぼうとするのは、生きるための術を得ようとしてのことです。豊かに生きるために自らを振り返りたいのです。そして何より、よりすばらしい未来をつくりたいからです。ここで教材を用意することが、より良い飯山をつくる基礎になるのです。大きな視野から見ると、防衛のためにも武器としての食糧を生産する様々な技術を伝えねばなりません。武器は使わないのがベストですが、緊急時に備え用意をしなければなりません。

教材は素材が多くあればあるほど、違うことが学べます。当たり前のもたくさん集めると、別の面が見えてきます。新潟県の佐渡・小木^{おぎ}民俗博物館を知っていますか。廃校になった木造校舎を博物館として使用し、建物だけでも懐かしい雰囲気があります。江戸期以前から、昭和の頃までの佐渡・小木の民俗資料を大量に集め、国重要民俗資料指定の船大工道具をはじめ、南佐渡の民具類や海底地形・魚類の模型などを多数収蔵展示しているのです。量があれば地域の当たり前の物すら、国にとって重要民俗資料にも指定されるのです。私はかつて上水内郡信州新町の信級資料館を見て感激したことがあります。廃校になった学校に民俗資料が詰まっていたのですが、そこで見た昔物乞いが投げ入れたと説明のあった小さな俵は、私の研究に大きな示唆を与えてくれました。どんな些細^{ささい}な物でも残しておけば、これまで気がつかなかった世界が見えてくる可能性があるのです。

いずれにしろ、消えつつある資料の散逸を阻止し、良い形で次代に伝えることは、私たちの未来に對する責務だといえます。これまでこれをしてこなかったのは行政の怠慢であり、それを許してきた

私たちの責任です。今が財政難で資金的にきついことはよくわかりますが、多少の無理をしても、ここで資料館をつくり、資料を収集保存しておかなければ、今後は不可能になります。評価は未来に任せるべきです。

これまで、すぐに成果が上がるようなことに行政は力を注いできました。しかし、すぐ評価されるようなことは流行と同じで、しばらく経つと有効性が薄れることが多々ありました。いわゆる行政による無駄遣いです。資料館は目に見えてすぐ効果が出るものではありませんが、長い目で見たならばきつと市民の知的財産保管庫になるはずで、飯山市はそろそろ理念を中心にシフトし、今は市民に少し我慢をしてもらってでも次の時代に役立てるものをつくるといった、遠くを見据えた行政をするべきです。

子どもたちには、きちんと文化の変化を示すことができるようにしたいものです。過去、今、未来を教えることのできる教育の場を用意しましょう。飯山市の良いこと、悪いことをきちんと子どもたちが認識できるように、生の教材を用意しましょう。テレビなどで流されるコマーシャルには意図があります。それをきちんと見極め、周囲に流されず、自分で幸せを選択できる能力を持つ子どもを育てるために、市でも良い点と悪い点を考えてもらいましょう。

現在のさまざまな物に対する評価が未来においてもそのまま続くとは限りません。今私たちが捨てている当たり前の物が、将来は大変な価値を持つ可能性があります。当たり前の物を保存しなければ、

私たちの生活の足跡は見えなくなりますが。

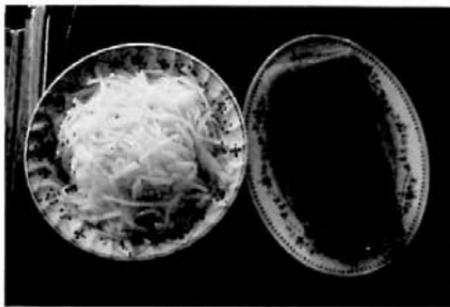
考古学は腐らないものを発掘の対象とします。このために、たとえば縄文時代という遺物として土器と石器だけがクローズアップされるのですが、身の回りの繊維を使った編物や木器なども、当時の生活では重要だったはずですが、今は見ることでできない腐ってしまった品物の方が、縄文人にとつてなじみ深く、大切だったかも知れないのです。仮に今我々が地中にうずもれてしまったら、腐らない物は私たちが使っている品物の中で、ほんのわずかだということを思い起こしてください。

残っていないものは日用品が多いのです。私たちの日常では新聞や広告、ビラなどが大量に配布されています。これは日常ではきわめて大事な情報を送ってくれ、なくてはならない物なのですが、これを全部保存しておく家はないでしょう。ところがそうした物は、実に見事に時代の変化を示してくれます。

かつて飯山で当たり前であった茅葺きの家はほとんど消えました。江戸時代に瓦葺きの家は珍しかったはずなのに、そうした家の方が残る率が多いのです。大きな家、金持ちの家に伝わった道具などは、家の大きさをかけた金銭などによって伝わるのですが、やはり当たり前の道具などは残らないのです。残らない物はみんなの共通する



正受庵の茅葺きの屋根



えご(右)と芋なます(左)

財産が多いのですから、公的機関で残すしかないでしょう。

このところスローフードが見直されています。希少価値の物と手をかけた物が、売り物として大きな価値を持つようになっていきます。長野県ではおやきや手打ちそばなどがその代表でしょう。飯山にも富倉^{とみくら}そばや笹寿司がありますが、私たちが誇るべき食文化です。ただし市内で飲食する時に、飯山でしか食べることでできない食文化は、まだまだ表に出て来ていません。お祭りの時の「えご」や「芋なます」など、手はかかるけれども飯山でしか食べられない物がお酒の席などで並んでいたらな

あと、よそ者の私は思います。

スローフードを求める動きも、価値観が転換していることによるのではないのでしょうか。こうした動きは、古い民家を取り込んで再生した家、内山紙^{うちやまがみ}の温かさの見直しなど、いろいろなところに見られます。皆さんは「何でも鑑定団」というテレビ番組を見たことがありますか。視聴者が持つてくるお宝に鑑定士が値段を付ける番組です。本来、値段を付けられない物もあるのですが、お金で価値を提示してくれるので、我々としてはわかりやすい番組です。この番組を見ると、思わぬ物が大変な高値を呼んでいます。私たちは物の価値を案外知らないまま捨てているのです。市の中に残っているながら捨てられるものの価

値を認識していきましょう。そのためにも、うち捨てられようとしている様々な物を保存しなければなりません。

資料を保存しておきさえすれば、将来それを確認することができるのです。今は無価値だと思っても、将来は評価が変わることがあります。田中耕一さんがノーベル賞を受ける元になったのは失敗でした。失敗した時にその行為が価値あるものとは思わなかったはずです。同じように今の価値で伝える伝えないを決める前に、残しうる物については将来に備えて保存しましょう。ましてや明らかに価値のある物は伝えねばなりません。そのために市が資料館を建設してくれるように、みんなで動きませんか。

資料を保存する場所については、資料の性格を前提にして差を設けるべきでしょう。もつとも良いのは空気調節、温度調節がされている密閉された部屋ですが、必要経費を考えると、すべてをそのような中に収蔵することは不可能でしょう。高価な絵画を日のあたる場所に置くことはいいはずですが、古文書を湿気の多いところや、火のそばに置くことも考えられません。絵画や古文書など、外気の影響や虫害を受けやすいものはしっかりとした空気調整がされた部屋でなければいけないと思います。価値の高い、世に二つとないものの保存には、注意を払うのが一般的です。

すぐに壊れる可能性のない物、変化の少ない物については、そこまでする必要はないでしょう。たとえば日常に使った鍋や釜を家の金庫の中においている人はいないはずで、化石や土器などだった

ら、廃校になった学校の校舎でもいいと思います。同じような性格を持った民具も同様でしょう。ただし木製品や衣類などは虫に食われますので、注意する必要があります。量が多い物については、空間の用意が早急に求められます。

外気などの変化に弱い物、絵画、写真、古文書などは特別室が必要ですが、絵画や写真などと古文書の間では、前者の方に気をつかわなければなりません。量の多い近世や近代の古文書、行政文書などをどういう状態で保存するかは、資料館全体の面積、その中で特別室をどれだけ設けられるかでしょうが、なるべく良い状態にしたいものです。

博物館の心臓部は展示室にあるのではなく、収蔵庫だということを知っていますか。展示されているのは収蔵品のほんの一部で、収集・整理・研究した成果を示しているに過ぎません。良い展示をするためにはどれだけ研究をしたかが問題になり、そのため多量の資料を準備しておく必要があるのです。立派な博物館ほど、収蔵庫に資金をかけているのです。

私は何よりも博物館では収蔵庫が必要だと思います。展示室は将来でも建設可能ですが、散逸する資料を保管する収蔵庫は一刻も早く建設しなければいけないのです。博物館はどうしても必要ですが、今すぐにできないのなら、未来への投資として、現在に生きる者の責任として、収蔵庫を用意すべきです。収蔵庫を用意し、そこがいつぱいになった時、これを展示する博物館が日程に上つてもいいと思います。それまでにしつかり研究をして、展示内容を豊かにしておけば、今つくるよりいい博物館

の展示ができます。どこの博物館でも、案外早く収蔵庫がいっぱいになっています。用意できる資金の中で、いかに多くの物を収蔵できるようにするか、収蔵庫についても考えるべきことがたくさんあります。

繰り返しますが、教育施設として展示を主体とする博物館はどうしても必要なのですが、それよりも大事なものは収蔵庫です。目下の情勢ではせめて収蔵庫を何とかして欲しいのです。私たちも無理をいおうというわけではありません。最小の経費で、最大の利益を得るために、理想だけをいうのではなく、妥協できる点は妥協しております。ですから大きな博物館建設を今求めることはしません。将来、市民の宝となる物を収蔵し、市民が自分の家にある宝物を安心して委託・寄託し、市民全体の宝にしていけるような、建物や装置を用意して欲しいのです。

おわりに

未来に向けて飯山市はこれからどのように動いていくのでしょうか。基本的に市民みんなが幸せになる、市民の心が通い合う市をめざさねばなりません。これまで述べてきたように、幸せはお金があるだけでは、物があるだけでは、達成できません。市の未来像には経済以外の論理をきちんと組み込まねばなりません。私たちが学ぼうとするのは、一人一人が幸せになるため、ひいては市民全体が幸せになるように考えるためですから、飯山市の未来を良くする行動です。そのためには、市民の過



針湖池

去、現在、飯山の過去と現在を振り返りながら、じっくり自分や市を位置づける教育が必要です。

未来において飯山市の主人公になってくれる可能性を秘めた子どもたちには、自分と周囲、ふるさとを愛する人間になって欲しいものです。そのためには、そのような成果を生む教育が必要です。ふるさと飯山の教育をしっかりといかねばなりません。本市の教育委員会の望月静雄さんは、発掘現場の案内だけでなく、小中学校にまで出かけて、ふるさとの教育をしてくれています。埋蔵文化財センターに見学に来る学校もあります。特にこれから総合学習が本格化した時、ふるさと教育は目玉になります。

こうした方向をもっと強化するためには、ふるさとを学ぶ教材だけでもしっかり用意していかねばなりません。

人づくりのための場が博物館です。博物館は決して古い物の陳列室でなく、見学者一人一人が自らを問い、ふるさとを確認することができ、教育施設です。本来、博物館は学校や図書館と同じ教育施設なのです。現状の博物館がややもすると観光施設に成り下がっているのは、その意義を教育せず、考えさせる展示になっていないからでしょう。飯山市民が博物館を欲しいと思うのは、決して一部の者のエゴではなく、未来に向けてどうしても必要だと考える、切なる心情があるのです。私たちはここできちんと、この時代に資料館建設の要求をし

たことを示しておきます。それが未来に対する私たちの言い訳にもなります。

木内正勝飯山市市長は飯山市のホームページの「新年ごあいさつ」の中で、「飯山市は、市町村合併をはじめ、行財政改革の断行や、広域によるゴミ処理施設の建設、さらには北陸新幹線飯山駅周辺整備など、将来への基盤を築く重大な時期を迎えています」と、飯山市が転換期を迎えていることを認識した上で、

昨年は、飯山を舞台とした映画が二本封切られ、日本の農村風情を見事に描いた映画の反響と、飯山の自然景観や人情の温かさに大きな評価をいただきました。様々な価値観や暮らし方を求め始めていたところへの映画上映は、新しい一つの提案でありました。同時に飯山市にとってそれは、私たちが「宝」として大事にしているありのままの姿を、大勢の人に知っていただく絶好の場でもありました。

農村が見直される昨今、市民の方々の価値観も変わり始めていることを実感しています。たとえば雪に対しても、以前のようなマイナスイメージは薄れ、雪の利活用や大地や空気を清々しいものにしてくれる自然の恵みとして認識されつつあるなど、ずいぶんと事情は変わりました。また暮らし方についても、都市部では自信が失われる傾向にある中、相対的に農村部では、自信を深めつつあるともいわれています。



なべくら山のブナ林

私は就任にあたり、「親切」をキーワードとした二十一世紀型旅産業の創出を掲げました。当市の宝は、雪国特有の人情味あふれる親切心であります。「飯山市は人に親切にする町」という宝が、どんな時代をも生き抜く力になると考えています。市職員とともに、それを支える親切な市役所づくりに努め、親切日本一の飯山市づくりをめざします。

親切な市民が迎え、日本の原風景を今に残す飯山市をゆっくり歩き、心をいやしていただきました。そうした二十一世紀型旅産業を「スローライフのすすめ」と称して、飯山市より全国に提案します。飯山市は昨年、歩くステージとして高い評価をいただきました。国における「遊歩百選」にも選ばれました。また信越県境のブナ林の中を縦貫する信越トレッキングコース構想を、広域市町村の連携のもと数年来の調査研究を進めており、いよいよ現実のものとなってまいりました。

「旅は二十一世紀最大の産業になる」といわれています。その玄関口となる北陸新幹線飯山駅を活かした広域観光の成否は、奥信濃地方の生命線かけた取り組みになると決意を新たにしております。日本経済の低迷は、市民の暮らしにも暗い影を落としていますが、苦しい時代だからこそ心を一つにして、互いの知恵を結集

することが、市政進展の原動力と考えています。より一層のご指導ご鞭撻をお願い申しあげ、新年のごあいさつといたします。

と述べておいでです。

ここに表明されている主張は、私たちが思っていることとほとんど同じです。実に見事に私たちの気持ちを代弁してくれています。市長は私たちの気持ちを汲み取りながら、先を見ているのです。「苦しい時だからこそ心を一つにして、互いの知恵を結集することが、市政進展の原動力」と、高らかにうたってくれています。「知恵」を練る場として、最低条件で資料館が必要なのです。

市長は「飯山の自然景観や人情の温かさ」を飯山の宝とし、『親切』をキーワードとした二十一世紀型旅産業の創出」を打ち出しています。つまり従来の評価とは異なる、新たな価値観を飯山から発信するということでしょう。これは市外の人に向ける前に、市民に訴えねばなりません。市民が親切になることは、市民が自己を認識しており、飯山に誇りを持つていることです。飯山市がどれだけ観光客を誘致しようとしても、魅力がなければ人はやってきません。飯山の魅力として市長も自然景観や人情をあげています。私もこれが飯山の最大の宝だと思えます。これをもっと自覚してもらうためには市民に学ぶ機会を与えなくてはなりません。しかも、飯山市民には飯山塾に代表されるように、自らのお金を使って、ふるさとを学ぼうとする人がいっぱいいるのです。この会場にこれだけの人が



「いいやま雪まつり」の雪像と子ども



いいやま雪まつり

集まるのが飯山であり、皆さんは市の宝なのです。

市長が「市民の方々の価値観も変わり始めていることを実感しています。たとえば雪に対しても、以前のようなマイナスイメー
ジは薄れ、雪の利活用や大地や空気を清々しいものにしてくれる
自然の恵みとして認識されつつある」といわれたように、市民の
価値観は大きく変わりつつあります。従来の価値観でいったら飯
山は遅れていて、雪深く、住むのに良くない場所だったから、人
口が減ってきたのです。しかし、今住んでいる人たちは違う意見
を持ち始めており、市民の多くがもったこうした意識を共有でき
るようになっています。飯山は発展するはずで、それは経済の論理
ではありません。人が減っても、経済が悪くても、もっと良い何
かがあれば、市民は悪条件を十分我慢できます。もっと良い何か
を学べるように、資料館を整備して欲しいのです。

飯山市は、これまでこうしたことを実践してきました。「いい
やま雪まつり」も「いいやま菜の花まつり」も、経済の論理から
離れたところから出発し、ボランティアがこれを支えてきました。

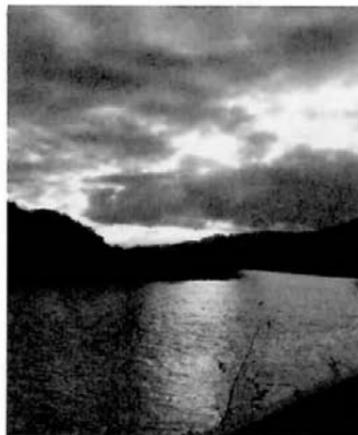


菜の花の頃

これによって飯山市がどれだけ豊かになったか、どれだけみんなが自信を持ったか、思い起こすべきです。苦しい時だからこそ心を大事にし、ふるさとに自信を持てる条件を整備しましょう。ふるさとを振り返ることは必要です。ふるさとをしつかり認識すれば、きつと飯山の良さにもっと気がつきます。そうなれば飯山市はもっと元気になります。

飯山市は「親切」をキーワードにしていくとのことです。これは市民に向かって幸せは金や物ではないですよと主張することにつながります。これをさらに進めれば、飯山市は従来の経済を優先する行政から、互いが心豊かに暮らすということは何だろうか、人の心を重要視する行政へと、転換していかざるを得ないと思います。これをきちんとすれば、飯山は日本でも最先端の行政に位置することになります。心の問題を行政に位置づけるために、当面、経済的理由によって博物館ができないとすれば、市の方向を定めるためにも、博物館の収蔵庫・資料館を用意して欲しいものです。

飯山はすべてが展示に堪えられる大変すばらしいところですから、良いものは現場に行ってみてもらえばいいでしょう。そのためには、あそこに行けばこんなすばらしい物が見られますよとか、あそ



飯山のシンボル千曲川

こに行くのだったらこれだけなどと、きちんと博物館の頭脳になるような核を設けたいものです。でも、この核の背後には資料収蔵庫がなければなりません。勉強をしないで博物館の頭脳などはできるわけがないからです。

また、私は飯山塾の塾長をしておりますが、これも飯山が誇るべき団体です。飯山を良くするためには学びたいという人が、自分のお金を出しあつて、勉強を続けているのです。こんな団体があること自体、飯山がすばらしいエネルギーを持っていることを示します。こうした学ぼうとする人たちのために、教材を用意してやることは市にとつても誇りとはなつても、恥ずかしいことではないはずですから、どうしても市にまったくお金がないというのなら、とりあえず私たち一人一人が少しでも

もお金を出しあつて、その基金をつくることぐらいまで考えませんか。我々も大きな負担をしているんだから、市ももっとやってくださいよ、というのも方法ではないでしょうか。

また、本当に必要な物は必要だと、市民に向けてもっと主張しましょう。